

Hem21 NEWS

公益財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

VOL. **71** 平成30年
(2018) 9月

CONTENTS

- 1～2 平成29年度ひょうご震災記念21世紀研究機構研究成果報告会
- 2 情報ひろば
- 3 地域支援活動の紹介
- 4 地域コミュニティの防災力向上～インクルーシブな地域防災へ～
- 5 HAT神戸掲示板
- 6～8 人と防災未来センター MIRAI

管理部

研究戦略センター

人と防災未来センター

こころのケアセンター

平成29年度ひょうご震災記念21世紀研究機構研究成果報告会 「～大阪北部地震を経験して～大災害時代の災後・災前を生きる ～南海トラフ地震に備えて～」を開催

研究戦略センターでは、南海トラフ地震に備えるため当センター研究調査部が平成29年度に実施した「東日本大震災被災者の生活復興プロジェクト」(復興庁委託事業)、ならびに平成28年度から29年度にかけて実施した「南海トラフ地震に対する復興ランドデザインと事前復興計画のあり方」の研究成果報告会を7月30日(月)、兵庫県公館大会議室で開催しました。(主催:公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構、共催:神戸新聞社、兵庫県立大学、後援:関西広域連合、兵庫県)

【第1部 東日本大震災・大阪北部地震に学ぶ生活復興事例に学ぶ生活復興～災後・災前にすぐに役立つ(生活復興)読本～】
①報告:河田 恵昭((公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長 兼阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター長)

災害対応の最終目標は被災者の生活再建であり、南海トラフ巨大地震や首都直下地震の被害を少なくするために、過去の教訓を生かさなければならぬ。昨年度復興庁の委託を受けてまとめた「事例に学ぶ生活復興」では8つの項目で種々の事例を紹介しており、これらを参考に被害軽減につなげることが大切。災害対策は作成して終わりではなく、時間経過とともに社会が変わり被災の内容も変わっていくという発想を持つこと、地域の災害の歴史と土地の特性を知った上で科学的思考に基づく災害対策が必要、といった話がありました。



②パネルディスカッション「災後から災前へ」
コーディネーター:河田 恵昭((公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長 兼阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター長)
パネリスト:室崎 益輝(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科長・教授)
阪本 真由美(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科准教授)
荒木 裕子(名古屋大学減災連携研究センター特任准教授)
三上 喜美男(神戸新聞社論説委員長)

「災後から災前へ」をテーマに、研究報告・意見交換を行いました。「日本は災後に検証する姿勢が非常に弱いので未来をイメージして災後の教訓を災前につなげることが必要」「西日本豪雨災害はボランティアの対応能力をはるかに超える災害であり、

自助、公助、互助と共助がスクラムを組む新しいシステムが必要」「平時からの行政と地域の活動団体との連携の仕組みづくりが大切」「復興は結果だけではなくその過程が大事」等の意見が出されました。

【第2部 南海トラフ地震に対する復興ランドデザインと事前復興計画のあり方】

①報告:牧 紀男(京都大学防災研究所社会防災研究部門都市防災計画分野教授)

災後の将来像をランドデザインとして住民と自治体が平時から共有し、それに基づく復興へと至るシナリオを事前に準備しておくことが必要。そのため南あわじ市福良地区をモデルに、住民の記憶やまちに対するイメージを共有し復興を考えるベースにしていく試みを行った。事前復興計画の作成が進まない原因は、災害発生の不確実性と災害の事前には予算がつかないことと述べ、防災、復興を一連の流れで担う防災・復興庁の必要性について提言されました。



②パネルディスカッション「平時から備える一力強い復興のために」
コーディネーター:牧 紀男(京都大学防災研究所社会防災研究部門都市防災計画分野教授)

パネリスト:姥浦 道生(東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻准教授)
佐々木 晶二(前・国土交通省国土交通政策研究所所長)
長坂 泰之(独立行政法人中小企業基盤整備機構高度化事業部参事兼経営診断統括室主任研究指導員)
井若 和久(徳島大学地域創生センター学術研究員)
高見 隆(兵庫県企画県民部防災企画局長・関西広域連合広域防災局長)

「平時から備える一力強い復興のために」をテーマに、パネリストから、「災害はそれ以前からのさまざまな課題を、時間を凝縮して顕著な形で出現させるため、これらの課題を事前にどう解決しておくのが重要」「企業であれば、日頃から経営革新をしている企業ほど復興のスピードが早い」「現行の復興制度では、復旧にかかる部分は事前に取り組みする制度があるが復興にか

かる部分は手薄だ」等の報告がありました。徳島県美波町の事前復興の先進事例に関して、「土地利用計画はできたが、ハード整備の予算の目途はないなどの課題があり、今後は地方創生やまちづくりの促進とあわせて考えていくことが必要」との報告がありました。事前復興を進めるため、「人口減少地域において災害後も地域社会が継続していくためにどうすべきか総合的に考えていくべき」「まちの復興を考える場合はイニシャルコストよりランニングコストを重視すべき」「将来に過大な負担を掛けないシステムを考えるべき」「住民・行政で長期的展望を共有することが重要」「事前復興という言葉の定着が必要」等の指摘がありました。

「第3部 総括」

シンポジウムの締めくくりとして、河田センター長、牧教授、三上論説委員長の鼎談により総括を行いました。そこでは、

これまでに経験のない規模での災害発生が珍しくなくなりつつある昨今、過去の災害の教訓を生かしつつ事前復興に取り組むに当たっては意識改革が必要であることをはじめ、自治体での防災専門職の配置や人材育成の重要性、住民参画の上で丁寧かつ地道に未来と一緒に描く努力を積み重ねていくことの重要性などが提起されました。

最後に河田センター長が、「今後の大災害に備えて防災省をぜひ設立したい。それには国民の理解がないと進まない」と述べた上で、「事前復興の試みを成功させなければならない。世界をリードするという誇りと勇気を持って進めたい」と語り、議論を締めくくりました。



情報ひろば

兵庫県こころのケアセンター

「こころのケア」シンポジウム参加者募集

「虐待の社会的コスト」をテーマにした講演と、兵庫県こころのケアセンターの研究報告を行います。

▶日時＝10月31日(水)13時30分～16時30分

▶場所＝兵庫県こころのケアセンター

▶プログラム

第1部 研究報告

大澤 智子(兵庫県こころのケアセンター研究主幹)

第2部 講演

和田 一郎(花園大学社会学部児童福祉学科学准教授)

▶定員＝150人

▶参加費＝無料

▶申し込み方法＝所定の参加申込書(※)に必要事項を記入の上、郵送、FAX、Eメールで下記申し込み・問い合わせ先へ。先着順で受け付け、定員になり次第締め切ります。

※下記ホームページからプリントアウトできます

●申し込み・問い合わせ

兵庫県こころのケアセンター 研修情報課

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2

TEL 078-200-3010 FAX 078-200-3017

Eメール kensyu@j-hits.org

http://www.j-hits.org/

研究戦略センター

第8回自治体災害対策全国会議参加者募集

阪神・淡路大震災以降、世界各地でさまざまな大災害が多発する中、全国の自治体職員がその都度異なる形で襲来する災害に対して迅速・的確に対応できるよう、被災自治体の復旧・復興への取り組みを情報共有し、今後の災害への備えについて考える「自治体災害対策全国会議」を平成23年度から毎年開催しています。

本年度は、「巨大災害に対処する」をテーマに、南海トラフ地震をはじめ国難を招きかねない巨大災害に対する国や自治体の防災・減災体制や復興への備えについて、あるべき姿や効果的な取り組み方案について考えます。

▶日時＝11月6日(火)13時30分～17時30分

11月7日(水)9時30分～15時30分

▶場所＝兵庫県公館 大会議室(神戸市中央区)

▶プログラム

【1日目】

基調講演：「国難災害に備える」

河田 恵昭(関西大学社会学部・社会安全研究センタ

ー長・特別任命教授／人と防災未来センター長)

特別講演：「防災・減災における科学技術開発の挑戦～戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)における取り組み～」

堀 宗朗(内閣府SIP「レジリエントな防災・減災機能の強化」プログラムディレクター／東京大学地震研究所教授)

基調報告：「進化する『とくしま-0(ゼロ)作戦』の推進～南海トラフ巨大地震、中央構造線・活断層地震での死者0(ゼロ)の実現に向けて～」

飯泉 嘉門(徳島県知事)

中間総括：室崎 益輝(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科長・教授／自治体災害対策全国会議企画部会長)

【2日目】

特別報告：「南海トラフ沿いで異常な現象が観測された際の新たな防災対応について」

高橋 伸輔(内閣府政策統括官(防災担当)付企画官)

パネルディスカッション第1部：

「巨大災害に対する即応体制と被災地支援」

座 長／岩田 孝仁(静岡大学防災総合センター長・教授)

報告者／「関西広域連合における広域防災の取り組み」

関西広域連合(亀井 浩之 広域防災局防災計画参事)

「南海トラフ地震等大規模災害への備え」

静岡県(杉保 聡正 危機管理監)

「高知県の南海トラフ地震対策」

高知県(田中 宏治 危機管理部副部長(総括))

パネルディスカッション第2部：「巨大災害からの復興の事前準備」

座 長／加藤 孝明(東京大学生産技術研究所准教授)

報告者／「東京都における事前復興の取組」

東京都(三浦 弘賢 総務局総合防災部情報統括担当課長)

「復興計画の事前策定」

和歌山県(伊藤 敏起 県土整備部都市住宅局都市政策課長)

「富士市事前都市復興計画の推進」

静岡県富士市(簗木 真一 都市整備部都市計画課長)

総括討議：五百旗頭 真((公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長)、室崎 益輝、岩田 孝仁、加藤 孝明

※プログラム内容は変更する場合があります

▶定員＝200人(自治体職員に限らずどなたでも参加していただけます)

▶参加費＝無料

▶申し込み方法＝下記ホームページから「第8回自治体災害対策全国会議チラシ」をダウンロードし、FAXまたはEメールで下記申し込み・問い合わせ先へ。

●申し込み・問い合わせ

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構研究戦略センター 交流推進課

TEL 078-262-5713 FAX 078-262-5122

Eメール zenkoku@dri.ne.jp

http://www.hemri21.jp/dcp/index.html

●地域支援活動の紹介●

兵庫県こころのケアセンターでは、県内外で発生した災害や事件・事故等に起因する「こころのケア」について、地域からの要請に基づき、体制整備に関する助言をはじめ、こころのケアチームの派遣を行い、現地で被災者（被害者）と支援者への支援活動を展開しています。

今年は、7月初旬に起きた西日本豪雨災害に対して、県内（宍粟市）のみならず、岡山県、広島県など他県からの要請に応じて、支援者のメンタルヘルス対応や現地のコンサルテーションを中心とした支援を行っています。

また、被災地域のニーズに応える専門性の高い精神科医療の提供と地域精神保健活動の支援を行う専門チームの人材育成およびスキルアップを目的として、兵庫県内の精神科医療機関を対象とした「ひょうごDPAT」研修を行っています。災害時は近隣自治体との支援・受援が必要となるため、本年度から情報交換等も行っています。

8月4日には、昨年度に引き続き南海トラフ地震を想定した

内閣府主催の大規模地震時医療活動訓練が実施され、兵庫県は、被災想定先の一つである高知県に「ひょうごDPAT」として支援に行く形で参加しました。訓練では、高知大学医学部附属病院で他県のDPATチームと協力して活動拠点の立ち上げ、模擬患者の受け入れ等の訓練を行いました。

その他、相談室では、電話・面接によりトラウマ（こころの傷）、PTSD（心的外傷後ストレス障害）等に関する相談に応じています。PTSDの症状により、就労や対人関係が困難になるなど、さまざまな生活上の問題を抱える人に対応し、社会資源の情報提供や、地域の支援機関につなげることで少しでも生活がスムーズに送れるような支援も行っています。

今後も、これまでに積み上げた活動実績や経験を基に、災害や事件・事故等の発生時の支援活動はもちろんPTSDの治療や相談にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。



高知県での大規模地震時医療活動訓練（ひょうごDPAT）



西日本豪雨災害の現地視察（宍粟市）

主な活動実績

- JR福知山線脱線事故（平成17年）
- 熊本地震（平成28年～）
- 能登半島地震災害（平成19年）
- スマトラ島沖地震における津波災害（平成17年）
- 新潟県中越沖地震災害（平成19年）
- 中国四川大震災（平成20～23年、平成25～26年）
- 台風第9号災害（平成21～24年）
- ニュージーランド地震（平成23年）
- 東日本大震災（平成23年～）
- チリ大地震（平成27年～）

地域コミュニティの防災力向上 ～インクルーシブな地域防災へ～



主任研究員 石塚 裕子

研究会の経緯

大規模な災害が多発し、公助の限界が声高に言われる中で自助、共助の重要性が再認識されて久しい。本機構では大阪大学大学院人間科学研究科の渥美公秀教授を代表に「地域コミュニティの防災力向上に関する研究～インクルーシブな地域防災へ」研究会を設置し、平成29年4月から取り組んでいる。

本研究会では、地域コミュニティ力の低下が危惧されるおりから、地域の個性や地域住民、行き交う人々の多様性に配慮したインクルーシブな地域防災とはいかにあるべきか、学知、実践知の両面から検討し、社会実装に向けた政策提言を行うことを目指している。

研究の課題

研究テーマのキーワードを「地域コミュニティ」「インクルーシブ」「防災力」とし、各概念を整理して2つの共通課題を特定した。

一つは“総合的、日常的であるべき”ということである。「防災力」だけが強い地域などなく、日常の多様な地域活動の積み重ねが地域コミュニティの力となり「防災力」を高める。このため、福祉、観光、教育、社会基盤整備などさまざまなまちづくり活動が連動し、多様な活動経験が市民の内発的な判断力を育み、暮らしの自律（相互扶助）生活圏をつくっていくような、総合的な地域コミュニティの構築である。

もう一つは“多様で動的（ネットワーク）であるべき”ということである。少子高齢化、長寿社会を迎え、ダイバーシティが進む中で、人々のカテゴリーも、地域のまとまりも、コミュニティを構成する人材も固定したものでなく動的であるべきで、複層的なつながりが、多様な人々を多様なネットワークの中でインクルードしていく社会をつくるべきであると考えられる。

モデル地区（兵庫県赤穂郡上郡町 赤松地区）での実践研究

本研究会は、学知、実践知の両面から検討していくことを特徴としているため、特定した2つの研究課題を現場で実践しながら、その解決プロセス、方法、理論について研究を進めることとした。対象地区は兵庫県西部の中山間地域である上郡町赤松地区である。上郡町では、他都市と同様に人口減少、少子高齢化が進行し、自治会単位の自主防災組織を持続させることが難しくなっている中で、連合自主防災組織という新たな枠組みを平成28年度に導入し、具体的な活動を模索する段階にあった。

本研究会は、当該地区と協働できる機会を得て、連合自主防災組織の活用、地域コミュニティの防災力向上に向け

た取り組みを具現化するための調査研究を進めている。当該地区は、上郡町の北部に位置し、人口は1,620人、世帯数は677世帯、高齢化率は37.7%である（平成30年2月時点）。千種川と岩木川の2つの谷筋の3つの旧小学校区内に13の集落（自治会）が分布している。これまでの防災活動は自治会単位で行われていたほか、地形地理的にも集落ごとに自律的に地域活動が展開される傾向にあったが、一部の集落では人口・世帯数の減少、高齢化により地域活動の維持が難しくなっている。

そのような中、本研究会では、個々の集落の現状把握（集落問診票）を行い、その結果を集落間で相互共有することから始めている。そして、防災だけではなく、いくつかの村づくりのテーマを設定し、防災力向上に資する複数の集落間ネットワークをつくることで、内発的な地区防災計画として立案することを目指している。また、全集落が協働して既に実施している白旗城祭（11月23日実施）に着目し、祭りの場をインクルーシブにすることで、災害時の要援護者対応を実験的に取り組む機会をつくり出す予定である。

政策提言に向けて

モデル地区での実践研究を経て、本研究会では、次の3つのテーマで政策提言を行っていく予定である。

- ①自助、共助、公助（官助）の再定義
“支援する-される”の枠組みを超えた自助、共助、公助の在り方を再定義し、多様な当事者が主体となった地域防災に取り組めるよう提言していく。
- ②自律した地域づくり（自治の回復）としての地域防災
地域づくり、コミュニティ施策の中に“防災”を位置付け、定着させていくための施策を提言していく。また、さまざまなテーマの地域活動を総合的に支える、分野統合できる仕組みについても言及していく。
- ③人口減少、超高齢社会における持続可能な（動的な）地域コミュニティの形成
交流人口をはじめ、地域の活動人口や外部者との協働、集落間連携など、人口減少期においても地域活動が持続可能となる動的なコミュニティ形成について提言していく。

本研究会では、上郡町赤松地区との協働実践に加え、事例視察（高知県黒潮町）、先進事例交流会（神戸・丹波・上郡・福島）なども実施してきた。今後は、政策提言先である県および市町村とも分野横断的な意見交換を計画していくなど、提言の施策化実現に向けた取り組みを展開していきたい。

兵庫県立美術館

特別展「サヴィニャック パリにかけたポスターの魔法」

レイモン・サヴィニャック(1907-2002)はフランスを代表するポスター作家です。陽気でシンブルな彼の作品は、それまでの伝統だった装飾的な要素を排したことでポスターの様式を一新しました。



(ドップ:清潔な子どもの日)1954年 ポスター(リトグラフ、紙)パリ市フォルネー図書館蔵 ©Annie Charpentier 2018
 「デクーヴェルト／発見」原画)1990年頃 原画(アクリル絵具、厚紙)ティエリ・ドゥヴァンク蔵 ©Annie Charpentier 2018

本展は、ポスターと併せて原画や関連作品も展示することで、サヴィニャックの仕事が多角的に捉えようと試みるものです。中でも、パリの街角を賑わせた巨大なポスター群は私たちに新鮮な驚きを与えてくれるでしょう。道行く人々の心を躍らせ、街を彩ったポスターの役割に思いを馳せながら、それらを魔術師のように操ったサヴィニャックの世界をご堪能ください。

■会期=10月27日(土)~12月24日(月・振休)

■観覧料=一般1,300円、大学生900円、70歳以上650円、高校生以下無料

県美プレミアムⅡ

特集 県政150周年記念「ひょうご近代150年~収蔵品でたどるひょうごのあちこち、150年のあの時この時~」

本年は、兵庫県が設置されて150年目に当たります。これを記念して開催する本展では、兵庫県立美術館収蔵品によって、「ひょうご近代」の150年を振り返ります。150年の時空を自由に行き来し、具体的な「あのとき」や「このとき」、「あちこち」や「そこ」や「ここ」といった具体的細部に目を凝らして用意したトピックごとに作品を



福田翠光(鶴(カフソツル))1940年 絹本着彩 展示することで、「ひょうご」が再発見できれば、と考えています。

■会期=11月4日(日)まで

■観覧料=一般500円、大学生400円、70歳以上250円、高校生以下無料

県美プレミアムⅡ

小企画「美術の中のかたち一手で見る造形 触りがいのある犬—中ハシクシゲ」

1989年から、作品に手で触れて鑑賞できる「美術の中のかたち一手で見る造形」シリーズ展を、ほぼ年1度のペースで開催しています。見えにくい人にも美術鑑賞の機会を広げる目的で始まり、回を重ねる中でさまざまなアプローチを通じ視覚優位の美術鑑賞のあり方そのものを問う機会ともなってきました。29回目となる今年は、常にユーモアを漂わせつつ彫刻の本質に斬り込む作風で知られ、近年は粘土による塑造制作に力を注ぐ中ハシクシゲ(1955-)を出品作家に迎え、彫刻における触覚的なものとは何かという根本の問題を改めて考えます。



制作途中の「触りがいのある犬」に触れる

■会期=11月4日(日)まで

■観覧料=一般500円、大学生400円、70歳以上250円、高校生以下無料

◎休館日=月曜(ただし12月24日は開館)

◎開館時間=10時~18時(特別展開催中の金曜・土曜は20時まで)

※入場は閉館の30分前まで

TEL 078-262-0901(代) <https://www.artm.pref.hyogo.jp/>

JICA関西

◆食べることから始める国際協力! JICA関西食堂の月替わりエスニック料理

JICA関西1階の食堂(カフェテリア方式)は、どなたでもご利用できます。完全禁煙で、安心して料理を楽しめ、子供椅子もご用意していますので、お子様連れも歓迎です。毎月の月替わりエスニック料理もご好評いただいております!ぜひ、お気軽にお立ち寄りください。



写真は9月のバヌアツ料理

メニューの詳細と写真については、

こちら→ <http://www.jica.go.jp/kansai/office/restaurant/index.html>

■営業時間=

(昼)11時半から14時まで (夜)17時半から21時まで

※各終了30分前ラストオーダー

■定休日=年中無休(年末年始を除く。)

◎問い合わせ

JICA関西(独立行政法人国際協力機構関西センター)総務課

TEL 078-261-0346 FAX 078-261-0342

Eメール jicaksic-event@jica.go.jp

その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック!

→ <http://www.jica.go.jp/kansai/>

日本赤十字社 兵庫県支部

平成30年7月豪雨災害に対する 日本赤十字社兵庫県支部の活動について

6月28日以降の台風第7号や梅雨前線の影響により、西日本を中心に全国的に広い範囲で豪雨が発生し、7月6日から8日の間に特別警報の運用開始以来で最多となる計11府県で大雨特別警報が発表され、全国で11府県61市37町4村に災害救助法が適用されました。



兵庫県支部では、隣接県である岡山県

に日赤災害医療コーディネーターチームを派遣し、行政および医療保健関係機関との連携を図り、ニーズの調査や各地から集まってくる医療チームの活動エリアの割り振り等の調整本部業務を担当しました。

また、医療救護班を岡山県南西部の被害が大きかった地域(高梁市・倉敷市)に派遣し、活動拠点本部の調整の下、避難所の巡回診療等の活動を行うとともに、ニーズが高まってきていた、被災者の「こころのケア」を複数の機関と協力して効果的に行うため、こころのケア調整班を派遣しました。

活動資金にご協力をお願いします

お寄せいただいた資金は、豪雨災害の被災者支援をはじめ、今後起こり得る災害への備えなど、皆さまのいのちと健康を守る活動に生かしてまいります。

■郵便局・ゆうちょ銀行からご協力いただけます

口座記号番号 01110-0-1136

口座加入者名 日本赤十字社兵庫県支部

※窓口で取り扱いは場合、振込手数料は無料です

◎問い合わせ

TEL 078-241-8921

赤十字 兵庫 検索



日本赤十字社 兵庫県支部
Japanese Red Cross Society

思いに色を、カタチを与える

写真集・詩集・自費出版の
お問い合わせは

神戸新聞総合印刷
神戸新聞総合出版センター

<http://www.kobennp-printing.co.jp/>

夏休み防災未来学校2018レポート



ペットボトル地震計をつくろう!

(7月21日、22日)

例年好評を得ているプログラムを、今年も京都大学阿武山観測所の協力により実施しました。地震計の仕組みを学んだ後、ペットボトルや乾電池など身近な素材を使って地震計を制作。完成品に紙を挟んで揺れの記録を取るなど、保護者の方と一緒に楽しみました。



ロープワークでミサンガをつくろう!

(7月24日、27日、8月5日)

毎年恒例のロープワークプログラムを今年も開催。非常時に役立つロープの結び方を身に付け、それを生かしてビーズを使ったオリジナルのミサンガを手作りしました。小さなお子さんには難しい結び方もありましたが、保護者や兄弟の力を借りながら作品を完成させました。



地震の周期を学ぶ ゆらゆら3兄弟をつくろう!

(7月25日、26日、8月7日)

紙パックやペットボトルキャップを使って、地震動の周期を調べる装置を制作。実際に装置を揺らして、地震発生の際に高層ビルなどが大きく揺れる長周期地震動などの仕組みも学びました。



サバイバル! 手作りラジオに挑戦しよう!

(7月28日、29日)

ダンボールやクリップなど身の回りのもので、電池を使わないシンプルなラジオを手作りしました。受信力が弱い構造のため、完成したラジオを手になぎさ公園に移動して試しました。最初からすぐに受信できる人、調整してやっと聞こえるようになった人などそれぞれでしたが、全員が完成させることができました。



非常時、トイレはどうする? 実験してつくってみよう!

(8月16日、21日)

災害時に大きな課題となるトイレ問題。地震や豪雨災害などでトイレが使えなくなったときに、どのような困ったことが起きるのか、そして、それを解決するためにはどのような備えが必要なのかを学びました。市販されている簡易トイレの紹介のほか、ネコ砂を使ってトイレキット作りにも挑戦しました。



土からつくったパステルDopasでお絵描きしよう!

(8月17日、18日)

地滑りや土砂崩れ等の災害にも関係する地層について学んだ上で、各地の地層から採取した土で作ったパステル「Dopas (ドパス)」で絵を描きました。指を使って描くことから最初は慣れない様子でしたが、最後には皆さんすてきな作品を完成させました。



おはなしひろば

(7月22日)

毎年、春・夏・冬に開催している、絵本や紙芝居のおはなし会を開催しました。毎回楽しみに参加してくれる子どもたちや、兄弟が他のプログラムに参加している間に足を運んでくれる乳幼児などでにぎわいました。



「ゆれるん」地震体験車がやってくる!

(8月2日)

神戸市消防局の協力を得て、今年も「ゆれるん」による地震体験を実施し、ご家族連れをはじめ多くの方が参加されました。実際に大地震の揺れを体験してみることで、いざというときの備えを考えるいい機会となりました。



人と防災未来センターでは、子どもから大人まで楽しみながら防災・減災について学ぶことができる「夏休み防災未来学校」を7月21日～9月2日に開催しました。夏休みの宿題にも役立つワークショッププログラムも多数実施し、家族連れを中心に多くの方々に参加いただきました。

究極の選択!? ゲーム「クロスロード」で防災を考えよう! (8月9日)

「災害時に起きる問題に対して、自分はどのような判断をするのか」を体験するゲームを実施。災害時には、立場や状況によって困ることや求めることが人それぞれ異なるため、解決が難しい問題も多く起こります。自分とは違う意見にも耳を傾けながら、いざというときの対策を考えておくことの大切さを学びました。



六甲山の災害展2018 (8月14日～26日)

土砂災害パネル展示、土石流模型実験、降雨体験装置、保水力実験などの展示から土砂災害の危険性を改めて学ぶ機会となりました。今年は阪神大水害から80年の節目の年であり、また西日本豪雨により多大な被害が出たこともあってか、例年以上に多くの方が参加されました。



新任研究員紹介

高岡 誠子 (たかおかせいこ)

皆さま初めまして。7月から人と防災未来センターの研究員として着任しました高岡誠子と申します。この6月までの約20年間、急性期領域で看護を行ってきました。災害支援としては、DMAT(災害派遣医療チーム)や、日本看護協会が派遣する災害支援ナース、国際緊急援助隊医療チームに登録し、災害時の活動を行ってきました。これまでは、主に急性期の災害医療・看護に携わっていました。しかし、生活者としての人間が、災害により影響を受けた社会で、どのような影響を受けながら時を刻み、生活を再建していくかを学び、支援することが重要であると考え、当センターへの就職を決意しました。



研究としては、人を中心に考え、医療者の視点から防災や減災に取り組んでいきます。災害対応に必要な組織、その連携と協働の在り方、被災した地域医療の復興、また避難所での生活を余儀なくされる方が、自己の健康を維持できるような支援をテーマに考えています。今後、多くの専門家や研究者の方々から、さまざまな学びを得て、災害時の活動や研究を行っていきたいと思います。ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
 観覧案内・予約 / TEL 078-262-5050 <http://www.dri.ne.jp/>

開館時間 9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)
 ※7月～9月は9時30分～18時(入館は17時まで)
 ※金曜、土曜は9時30分～19時(入館は18時まで)

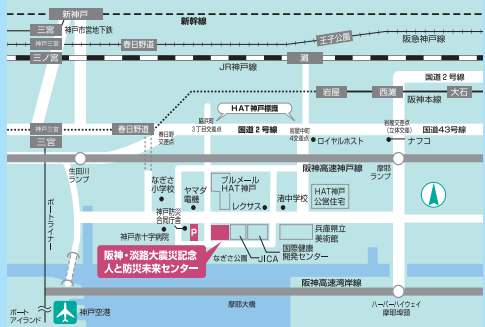
入館料金	大人	大学生	高校生/小・中学生
	600円(450円)	450円(350円)	無料
[障がい者]			
入館料金	大人	大学生	高校生/小・中学生
	300円(100円)	200円(50円)	無料
[70歳以上の高齢者] 300円(200円)			

※()は20人以上の団体料金
 ※毎月17日(休館日の場合は翌18日)は入館無料

休館日 毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日
 ※ゴールデンウィーク期間中(4月29日から5月5日まで)は無休
 ※資料室の開室日についてはホームページでご確認ください

交通

- 鉄道**
- ・阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
 - ・JR「灘」駅南口から徒歩12分
 - ・阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分
- バス**
- ・三宮駅前から約15分
- 車**
- ・阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
 - ・阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
 - ・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分
- 有料駐車場あり ● バス待機所(予約制/無料)あり



「HAT減災サマー・フェス」を開催しました

人と防災未来センターでは、防災意識の向上を図るため、また、地元HAT神戸の住民の方々との地域交流の場として、8月4日に「HAT減災サマー・フェス」を開催しました。

平成28年度から始まり3回目となる今回は、連日真夏日が続中にもかかわらず、約1,200人の方が来場されました。屋外ひろばを中心に行った「減災縁日」では、「新聞紙でスリッパをつくろう!」「ビニール袋でポンチョをつくろう!」などの防災・減災に役立つワークショップのほか、夏ならではの水遊びプログラム「プールで足指キャップつかみ競争」や小さな子どもから楽しめる「水遊びプール」などを実施し、家族連れを中心に多くの方にお楽しみいただけたようです。



ひとぼうステージでのセンター長あいさつ



ひとぼうステージでのセンター長と研究員によるトークショー

また、近隣住民や渚中学校の防災ジュニアリーダーの皆さんには、ボランティアとして多くの方々に、プログラムの準備から運営まで幅広くお手伝いいただきました。

夕方6時からの「ALL HATひとぼうステージ」では、渚中学校の防災ジュニアリーダーの生徒さんが司会を担当。HAT神戸の住民であるふれあいのまちづくり協議会の代表者と河田センター長によるあいさつ、センター長と研究員によるトークショーなどが行われ大盛況のうちに幕を閉じました。



ビニール袋でポンチョをつくろう!



プールで足指キャップつかみ競争

大学生のインターンシップを受け入れました

人と防災未来センターでは8月8日、関西国際大学の学生8人をインターンシップとして迎えました。展示コーナーを約90分見学した後、2班に分かれて来館者対応業務補助と資料室・収蔵庫の観覧を実施しました。

来館者対応業務補助では、西館1階での入館チケットの半券切りやエレベーターへの案内のほか、西館4階で1.17シアターや大震災ホールの案内などを行いました。

また、資料室では、西館5階で阪神・淡路大震災発生時に発行された新聞や震災関連の書籍などを観覧した後、西館7階収蔵庫において、5階に収蔵しきれない新聞や書籍をはじめ、炊



炊き出し用大釜を観覧



来館者対応業務を補助

き出し用の大釜や被災した車両の一部、避難所における娯楽を求めてドラム缶で作った太鼓などのモノ資料を観覧しました。

参加した学生からは、「外国の方を案内した時は多少緊張したが、貴重な体験ができた」「資料がこんなにたくさん収蔵されていることに驚いた。被災の恐ろしさ、大変さを改めて感じた」などの感想が寄せられました。



震災関連書籍を閲覧



Hem21NEWS
vol.71

平成30年9月発行

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2(人と防災未来センター)
<http://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部

TEL 078-262-5580
FAX 078-262-5587

●研究戦略センター

▶研究調査部
TEL 078-262-5570
FAX 078-262-5593

●人と防災未来センター

TEL 078-262-5050
FAX 078-262-5055

▶学術交流部

TEL 078-262-5713
FAX 078-262-5122

●こころのケアセンター

〒651-0073
神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2
TEL 078-200-3010
FAX 078-200-3017

ニュースレターに関するご意見・ご感想を機構までお寄せください